



ちっ ぱいお嬢様 でも
ラッキースケベなら許されるよね!!

—豊富な表情とIfの衣装差分—

(がんばりました)

「だって…少しはいいとこ見せたいじゃない
…ただの淋しい娘じゃなくて…」
彼女がこちらに聞こえないように小声で
呟いたが、はつきり聞いてしまった。

「私は…、やっぱりいいわ。
どうせ一週間くらいしかいないんで、
彼女は独り言のように言った。
声色は辛辣だったが、その表情は
どこか寂しげだった。」

一気づいたら増えすぎていた文章量

「三日間会話もあまりしていない。
もちろん自分の本来の仕事であるため
仕方ない事なのだが、ああ約束した事前
ま訳ない気持ちになった。」

うそれにしてもこの体勢が楽なのだろうかと、
長スカートを履いているのにも関わらず、
無防備に脚が露出している。

彼女の父、エドワード氏は娘を無事に帰ってくれた人間として、すっかりこちらに氣を許してくれたようだ。

見から自分が担当する仕事について粗方の説明を受けた後、彼女の話題になった。

「まなかつたね、娘のマテイが余計な手間を掛けさせてしまつて……あの娘はここ最近、こゝで勝手に歩き回る事が多くなつてな……」

毎イが何不自由ない環境で育めるように財を尽くして様々なものを与えているのだが、やはり年頃の娘というものは難しいのだな……」

彼自身も気づいていないかもしれないが、
この発言からは、父である自分自身が
切に落ちている気がした。

「……!! ……………ははっ……」

「そうよね、やっぱり無理よね、
当然なのに、そう言われるのが怖かった……」

「もう……いいわ……いつて……
さんざん振り回してごめんね……」

理性と感情、我儘と優しさを併せ持つ
マティという少女との話。



雨の中で出会った少女との数日間の話。



「うう… ひつく…
一人で街に行くんじゃないかった…
お屋敷へはどっちへ行けばいいの…？
暗い… さむいよ…」

経理の仕事を手伝うため
地方の屋敷に向かっている途中、
途方に暮れて雨宿りしている少女がいた。
年頃は理性が芽生える頃だろうか。



「…っ!! だ、誰?!」

少女がこちらに気づいた。

この状況で会った見知らぬ男、
かなり怖がっている。



「な、なんですか…？私はここで雨宿り
してるだけなんだけど…かまわないで」
明らかに強がっている。

言う通りに通り過ぎようと思ったが、
少女を案じてすぐに引き返してしまった。
「…ほ、ほんとになに…？」

これ以上不審がらせてはいけない。

自分は仕事でこの先の屋敷に向かつて
いると優しく丁寧に説明した。



「…それ、もしかして私の家じゃない…？
あなたの雇い主の名前は？」
エドワードⅡバトラーと答えた。

「お父様だ…！」
自分の家に向かう人間だと判り、
安堵したようだ。
「じゃあ、あなたが
何日かお屋敷に泊まるお客様なの？」





少女は、これから向かう屋敷の娘だった。
「そうなんだ…じゃあ…えつと…
せつかくだから連れてってあげるわ。」
言葉とは裏腹に、こちらに先導させた。

「私は…、やっぱいいわ。
どうせ一週間くらいしかいないんでしょ」
彼女は独り言のように言った。
声色は辛辣だったが、その表情は
どこか寂しげだった。

それから、少女と共に
目的地の邸宅に向かった。

道中、少女はむつつりとした顔のまま
殆ど喋ることもなかったが、しばしば
こちらの顔を興味あり気に見た。

これから向かう邸宅は最寄りの鉄道駅も
遠いかなりの田舎にある。

もしかしたら知らない人間が
珍しいのだろうか。

静まった夜の田舎町からさらに人気のない道を歩き、ようやく目的の邸宅に辿り着くことができた。

迎えてくれたメイドと老執事は客人が当主の娘と一緒に来たことに驚いたが、事情を説明してエドワード氏の元まで案内してもらった。

振り向くと、その少女は怯えた顔でどこか入りたくなさそうにもじもじしていた。

やはり、独りで出かけた挙句帰りが遅くなった事で叱られるのを恐れているのだろう。

彼女の父、エドワード氏は娘を無事に連れ帰ってくれた人間として、すっかりこちらに気を許してくれたようだ。

これから自分が担当する仕事について粗方の説明を受けた後、彼女の話題になった。

「すまなかったね、娘のマティが余計な手間を掛けさせてしまったて： あの子はここ最近、一人で勝手に歩き回る事が多くなつてな：

マティが何不自由ない環境で育めるように財を尽くして様々なものを与えているのだが、やはり年頃の娘というものは難しいのだな：」

彼自身も気づいていないかもしれないが、その発言からは、父である自分自身が抜け落ちている気がした。

「では、一週間ほどになると思うが、よろしく頼むよ。屋敷はこれからメイドに案内させる。」

話を済ませ、メイドと共に廊下を歩きだした時、背後からエドワード氏が娘を呼びつけるのが聞こえた。

「マテイ!!もう帰っているんだろう…?!今回ばかりは話があるから私の元に来なさい!」

屋敷の案内が終わった後、客用の部屋へと
向かう途中、人気のない廊下で少女が
立ち尽くしていた。



案の定、今日の出来事についてエドワード氏
からお叱りを受けたのだろう。

「……けないでよ…叱るときはっかり…
呼びつけて…私のことなんてろくに
気にしてないくせに…」



壁に向かってぶつぶつと不満を零していた。
今にも声を上げて泣き出しそうな声色だ。

彼女ら親子の気持ちにはかなりのすれ違いが
あるようだ、さっき感じたように…

「き、聞いてた……？」
素直に頷いた。彼女は肩を震わせながら涙を
零していて、泣くのを必死にこらえている。
心配そうに見つめたが、かける言葉が
出てこなかった。



「……馬鹿な娘だと思ってるんでしょ、
勝手に出て、迷って、叱られて泣いて……誰も
私のことわかってくれない……!!」
今にも自棄になりそうだと思う、自分でも
良ければ話を聞くと行ってしまった。

「……………あ、あんたが…………？」

言った直後に後悔した。会ったのが今日で
門外漢もいいところであり、まして男だ。
取り消そうとした直後――



「…………ぜつつたいにお説教とかしないって約束
して…黙って聞いて…それでもいい…？」
そう釘を刺す彼女に頷いた。

「…………ありがと…。しばらくしたら私の部屋に
来てね…いや、絶対来なさいよ…！」

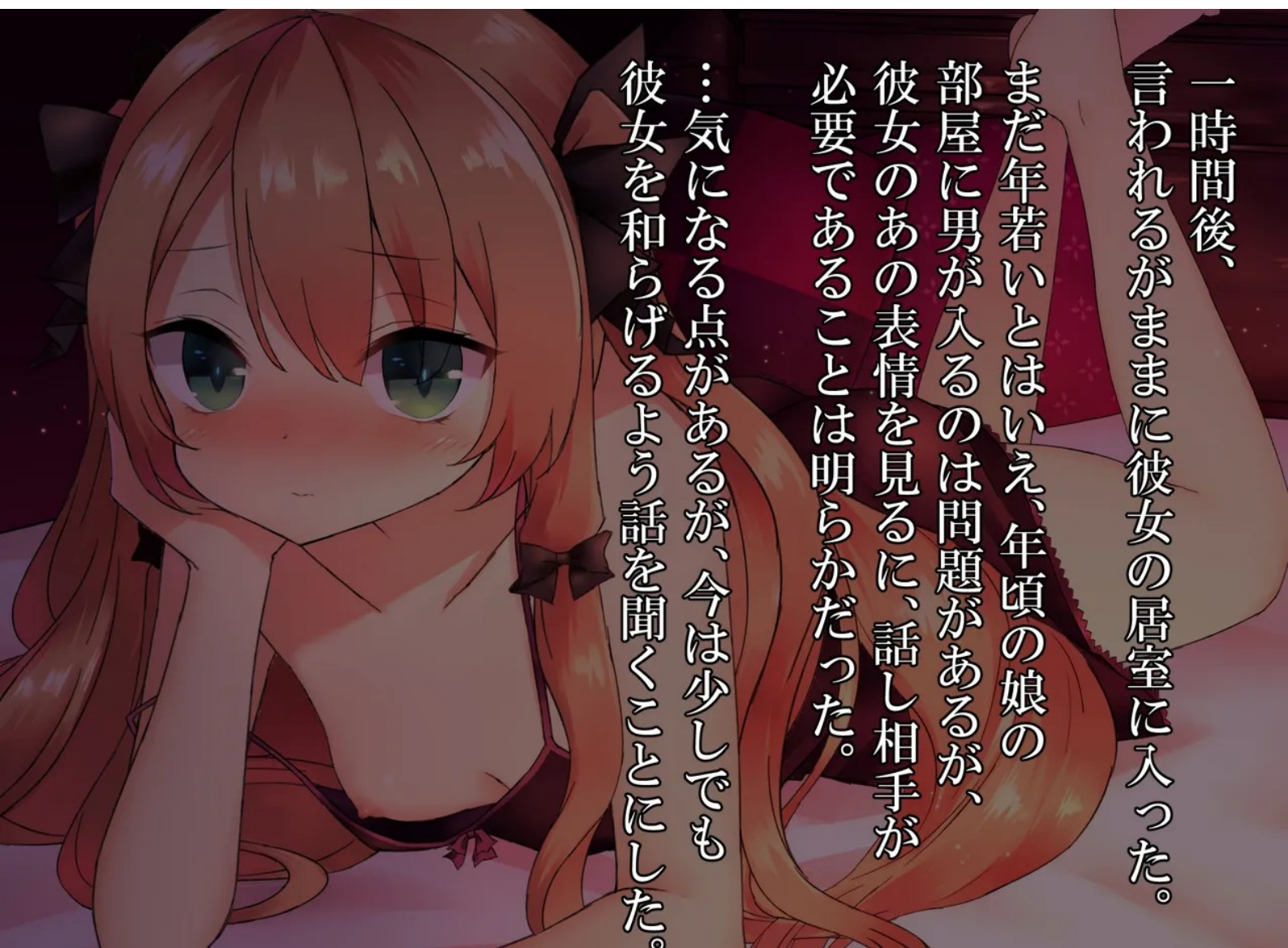


一時間後、

言われるがままに彼女の居室に入った。

まだ年若いとはいえ、年頃の娘の
部屋に男が入るのは問題があるが、
彼女のあの表情を見るに、話し相手が
必要であることは明らかだった。

：気になる点があるが、今は少しでも
彼女を和らげるよう話を聞くことにした。



「…ドア締めて、こっちに来て。」

寝間着姿で寝ころぶ彼女は近くに誘った。

「べ、別にそういう意味じゃないから！
あなたの立場が危くなるような事は
な、ないから…早く来て」

彼女は年の割に男女の事情を
意識しているようだ。



「…名前、まだ言ってなかったわよね、
私は…マティっていうの。」

「今日は…送ってくれてありがと…
誰にも言わず一人で街に出ちゃって、
帰りがとても遅くなったから
すごい叱られちゃった…」

「どうやら慣れない場所で帰り道を忘れた
ため、あの時間にあの場所にいたようだ。」



「私だって悪かったの、勝手に出かけて、心配かけちゃったから…でもね、私だって何か新しいことがしたかったの…!!」

話を聞くとマティは一人娘で、母は既に他界しており、父は事業で忙しい身。最寄りの学校も遠いので、教育はすべてガヴァネスが行っているらしい。

その家庭教師もまた厳しい性質の人間で、胸を打ち明けられる人間は殆どいないようだ。



父のエドワード氏も、彼なりにマティへの愛情がある事は同性として理解できる。だが、箱入りである娘の生活がどれだけ退屈で、孤独かが見えていないのだ。

彼女が自分に身の上と本音を話したのは、相手が一時的に屋敷に滞在するだけの「外部」の人間である事が大きかったのだろう。



「ありがとう…聞いてくれて…」

全部話したら少し気分が晴れたわ」

「…ねえ、屋敷にいる間、ずっと仕事してるわけじゃないんでしょう？ 私もここ数日はお勉強が休みだから、一日中暇なの…だから…」



「私の付き人になってくれる？」

「…えつと…ここにいる間だけでいいから、私の相手をしてほしいの…お願い」

自分は承諾した。

この屋敷にいる数日間、彼女の側に仕える
と。それがたとえ僅かな手すきの時間でも。



「…ほんと?! よろしくね!」
こちらの返答を聞いて、彼女はようやく
年相応の調子で喜んだ。

「ちゃんと私に仕えるのよ♪
あなたは専属の使用人になるんだから」



その言葉を受けて、自分は使用人として
まず、彼女の着衣の乱れを指摘した。

正直部屋に入った時から気になっては
いたのだが、ついさっきまでとても
言い出せる空気ではなかったのだ。

「…え？ 寝間着でもあんまりだらしない
姿勢でいるとダメ？ 別にそんなの…」





「……もしかして……!!」

「み、みえてた…?! 見たつていうの?!」
今にも見えそうだった、と嘘を付いた。

「と、とにかく! さっきの約束、
忘れないでよね! わかった?」





翌朝、マテイに起こされた。

「ほら、もう朝御飯の時間でしょ！
作ってあげたから、早く起きなさい！」

……作ってあげた？ 彼女が……？

食堂に行くと、簡素ながらも美味しそうな
伝統的な朝食が並んでいた。



パン、ベーコンエッグを中心としてトマトの
ソテー、ビーンズ、それにデザートとして
フルーツが小さく切られて盛られている。

「…なによ、作ってあげたって言っただでしょ？」
メイド達を作るのではないか、と聞いた。
「…わ、私を作るのだっておいしいんだから！」
純粹に疑問として聞いた、と謝った。
マティが早く起きて作ってくれたのだ。



「えつと…人に見られながら食べるのも
落ち着かないでしょう？今朝は必要ないって
私が下がらせたのよ。」

「それに、たまにお屋敷内で風邪が流行ったりした時とか、私が自分で用意することもあるわ。」

…昨日の様子を見ても、使用人の人数は最低限しか居ないようだ。そんな状況になったら一般の父子家庭の娘と同じである…



昨日の印象では判らなかったが、どうやら本来のマティはかなりののしっかり者のようだ。

「昨日はかなりあなたを振り回しちゃったから…そのお礼も兼ねてよ。あくまで主人は私なんだから…勘違いしないでね!」
どうやら彼女なりの付き人への返礼らしい。



「だって…少しはいいとこ見せたいじゃない…ただの淋しい娘じゃなくて…」
彼女がこちらに聞こえないように小声で呟いたが、はつきり聞いてしまった。

聞こえなかったふりをし、食べ始めた。
マティの気持ちを慮り、聞こえるような声で
何度も味を褒めた。実際、美味しかった。



「ふ、ふーん♪どれも簡単に見えて、味付けの
加減が大事なのよ。」

「フルーツは、このクリームをたっぷりとかけるのが美味しいのよ。お母様もこれが好きだったんだ…」



そう言うと彼女はお手本のようにフルーツにクリームを垂らし始めた。

「ふふ………！ かわいい…」



彼女は思いがけず
肘をテーブルの縁にぶつけてしまい、
クリームの入った瓶を落としてしまった。



テーブルに落ちた瓶は手前に向かって
倒れてしまい――

「…!! ごぼしちゃった…」



「ぐすつ… ベとべと…もうやだ…
今日はいいい日になると思ってたのに
粗相しちゃった…」

背伸びしたい彼女は、零した事よりも
自分の前で情けない姿を見せたことに
ショックを受けたようで、茫然としている。



ここで彼女に単に着替えてくることを
勧めるのもどこか冷たい気がしたので、
自分が拭くと申し出た。

「…あ、ありがと…」

で、でもここままでしみ込んじゃったら、
服の上から拭いたところまで…」



「はあ?!

着替えを持ってくるから

身体はここで拭く?! あなたが?」

「そんなこと…何考えてるの?!
だって私はお…おん…」



「……ここから私の部屋へは遠いし、主人を
あられもない姿で歩き回らせるわけには
いかない？ それに一人でやらせると
寂しさと情けなさで泣き出しそう？」

「(なんで私の心が読めるのよ……)
っ、つまり、使用人として私の手を煩わせ
ないためにやるってことね？」



「…ほら、もう向いていいわよ！」

絶対変なことしないで、さっさとやって！」

…シャツの前を開ける程度を想定したが、
マティはほぼ完全に脱ぎ、乳房を手を隠す
かなり恥ずかしそうな恰好になっていた。
ぬるま湯を浸したハンカチでべた付きを
丁寧に拭いていく。



「…ひんっ！ …っ、続けなさいよ
（やだ…何だかくすぐったくて、変な声
出ちゃいそう…）」



「（…やっぱり、これってよく考えなくても
かなり恥ずかしいことじゃない…？）」

「でも、ちゃんと丁寧に拭いてくれてる…
誰かにこんなに尽くしてもらったのって、
小さいとき以来かも…」



「この人はちゃんと私を視てくれるんだ…」

あらかた付いたものを拭き終えた。
マティは何か考えていたようだったが、
終わったと気づきハッと我に返った。

「…もういい？ もう、なんにもごじやまで
しなくなっただけいいんだから…!!
でも…ありがとう」



その後は仕事に取り掛かり、エドワード氏と事業の確認と整理をし、必要な申請を済ませた。本格的な経理作業は各種書類が届いてからになりそうだ。

マティとはあの後も食事時や夜に接したが、特に変わったこともなく、たわいない会話やカード遊びをする程度だった。

ただ、彼女の態度は初めと比べ明らかにこちらへ打ち解けたものへ変わっていった。

屋敷に来て三日目の朝。
季節外れに暑くなりそうな天気だった。

当初の予定より早く仕事が進み、書類待ち
となったのでエドワード氏からマティを
連れて出かけてくるよう提案された。

彼女が自分に懐いているのはすっかり屋敷
内の公認で、エドワード氏も自分が付いてる
方が安心なようだ。

「ちよつと待ってて……！ 準備するから！
連れていきたい場所があるの！」

準備を終えたマティは薄手の袖のない
ワンピース姿で出てきた。

季節外れの暑さとはいえ、そこまで薄着で
なくてもいいと思うのだが…



妙齡のメイドがにこやかに見送りに来たが、
マティの服をしばらく見つめたのち、
ハッと驚いた顔をした。

「ほら、日が高いうちに行くわよ！
着いてきなさい！ 付き人さん」



彼女に連れられ、外へ出た。
快晴のこの土地は木々の新緑と青空の対比が
目を見張るほど美しかった。

「こんないい日にちようどあなたがいて
助かったわ。そんなに遠くないけど
一人で行くと危ないって怒られちゃうから」

そう言っただけで彼女は果てなく続く農道を
進んでいった。時に鬱蒼とした森にも入り、
どんな場所かが気になったが。

マティは着いてからのお楽しみと行つた。

「はい、ここからは目をつぶって！
足元にだけ気を付けなさいよ」

そう言っただけで彼女は自分と手を繋ぎ、こちらが
転ばないようにゆっくりと先導した。

すっかり年相応の一面を見せてくれるようにな
ったと、内心で少し喜んだ。

「着いたわよ！見ていいわ」

そこには綺麗な砂浜が広がっていた。
あまり人が来ないであろうこの海岸は、
自然のままの美しい姿を見せていた。

「ね、来てよかったでしょ！」



「小さい頃は家族三人でよく来てたの。
大きくなつてからはあまり来れなかったけど、
いつか外の誰かに見せてあげたかったのよ。」

「…ふう…ずっと歩いて来たから
汗かいちゃった…今日は暑いわよね…」



何気なしに相槌したが、マティが
さつきからこちらの様子を伺っている
気がする。

「海か…ちようどいいわね」

…まさか泳ぐつもりだろうか？



「今だって他に人がいないし…」

そう言って彼女はワンピースの裾に
手を伸ばして――

「せつかくここまで来たんだし、別に泳いだっていいわよね?」
と、マティは突然脱ぎ始めた。

思わず目を背けたが、
彼女はさつきからこちらの反応を
伺っているような気がする。



「向こうで待ってるって？ 一人じゃ
つまんないじゃない、別に何も
やましいことなんかないでしょ？」

やはりこちらを誘っている。よく見ると
下着に妙な光沢があるような…



「く...っ...ふ...ふ...」



!!

「…あっはは、びっくりしたあ？」
彼女はこちらが動揺したのを見て
得意げに笑った。

最初からこのつもりで水着を中に着てきた
のだろう。してやったりと思ってるようだ。
ただ、自分が動揺したのはそれだけでなく…



ただでさえ勢いよくめくり上げたうえ、
布地の小さい大胆な水着にしていたため…

「なに恥ずかしがってんのよ？ダイタンな
水着だからあ？……って……え……？」





「…な…なんで?! ちよつと…
いやあ…ぬげない…見ないで!!」
焦りでワンピースの長い布地が腕に
引っかかり、彼女は恥ずかしい恰好のまま
身体をくねらせている。





「いやあ——
「ちよつとドキツとさせようとした
だけなのに、なんでこうなるの?!」

その後は二人で普通に
海を満喫したが、マティは終始目を
合わせず赤面したままだった――

そして、夕暮れが帰りを促し――

……まあ予想できたことではあったが
替えの下着の事を忘れていたようだ。



マティは落ち着かなさそうに
そわそわしている。

「……ほら、さっさと帰るわよ！」



日が落ちて、急に冷えてきたので上着を貸してあげた。そうでなくでもこの姿のマティを歩かせるわけにはいかない……

翌日からは書類が届き、一日中収支・各税の書類の相手をしていたため
マテイに構える時間は殆ど取れなかった。

三日後の夜、ようやく区切りを付けられ
自分の寝室へ戻ると…

「すう… すう…」

マティが部屋のソファで体育座りのまま
眠っていた。もしかしたら自分が戻るのを
ずっと待っていたのだろうか。



この三日間会話もあまりしていない。
もちろん自分の本来の仕事であるため
仕方ない事なのだが、ああ約束した手前
申し訳ない気持ちになった。

…それにしてもこの体勢が楽なのだろうか、
長いスカートを履いているのにも関わらず、
無防備に脚が露出している。



「ん……？ あれ……私……寝ちゃってた？」
寝ぼけ眼のままマティが続けた。

「あ……おかえり……じゃなかった、おつかれさま」
彼女に、ここ三日間ろくに相手できなかつた
ことを少し詫びた。



「…別にいいわよ。私は忙しそうな時に無理を言うような『レディ』じゃないもの。ただ…ちよつと会いたかったただけだもん」

彼女は怒っているわけではなかった。雰囲気や口調は高飛車に見えるが、その実分別があり人を気遣える優しい娘だ。



「…つてあれ…私…え?!」
意識が鮮明になって自分の体勢に気づいた。

「え…いつ戻って…
起きるまで…
見てた?!」



戻ってから時間が経っているのも起きるまで
見てたのも事実なので返答に詰まった。

「やああ!!へ、へんな事してないよね?!
もう……あ、きやああああ!!」



慌ててソファから降りようとしたマティは
スカートの裾で足を滑らせ勢いよく
顔から床に倒れていった。

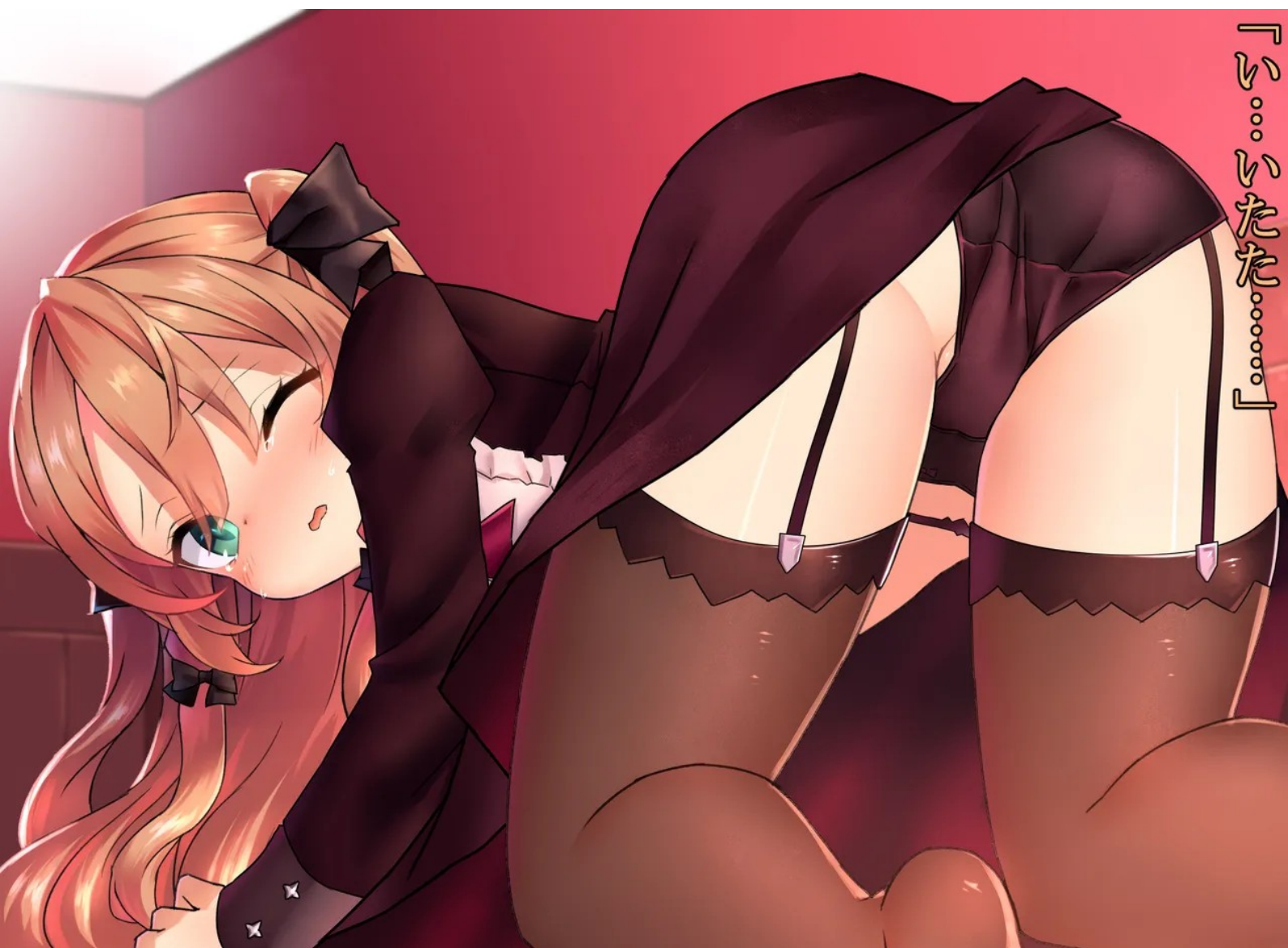
慌てて受け止めようとしたが――



……！！

次の瞬間なぜか視界は宙を回り、
物凄い音がして背中を強く打った。

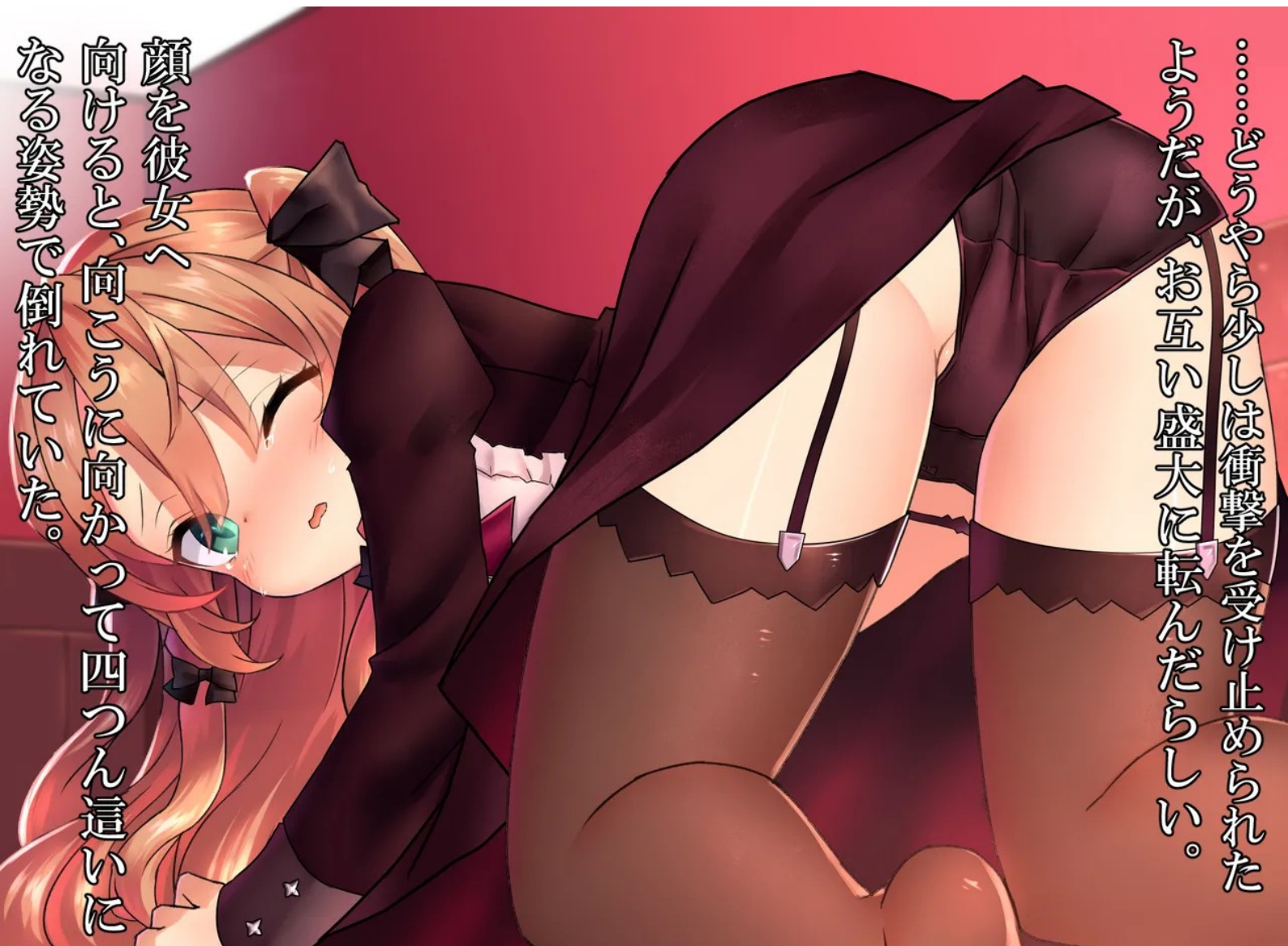
彼女の身体が自分の上を乗り越えていった
気がした。慌ててマティの様子を見ると――。



「い…いたた……」

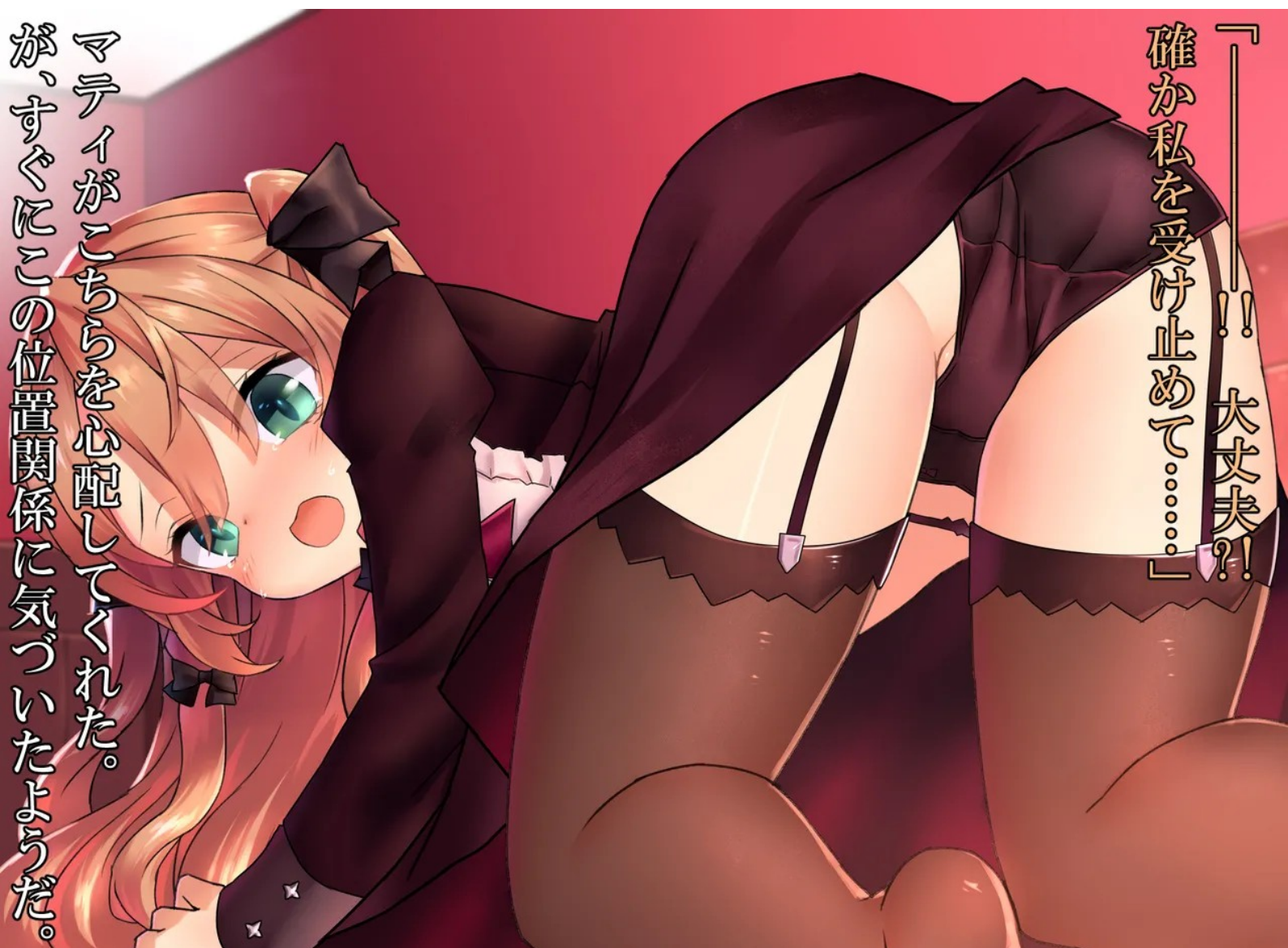
……どうやら少しは衝撃を受け止められた
ようだが、お互い盛大に転んだらしい。

顔を彼女へ
向けると、向こうに向かつて四つん這い
なる姿勢で倒れていた。



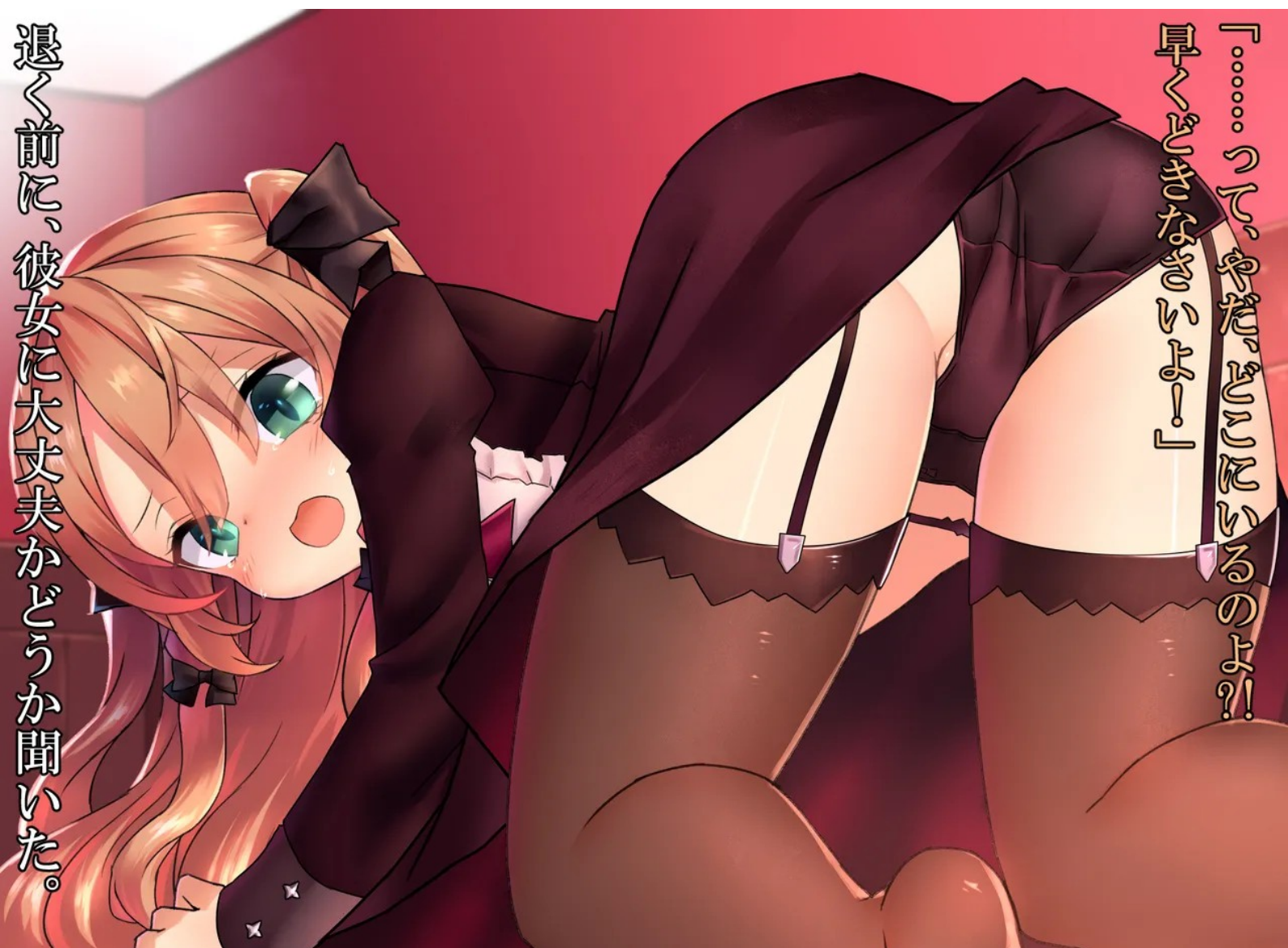
「大丈夫?!
確か私を受け止めて……」

マテイがこちらを心配してくれた。
が、すぐにこの位置関係に気づいたようだ。



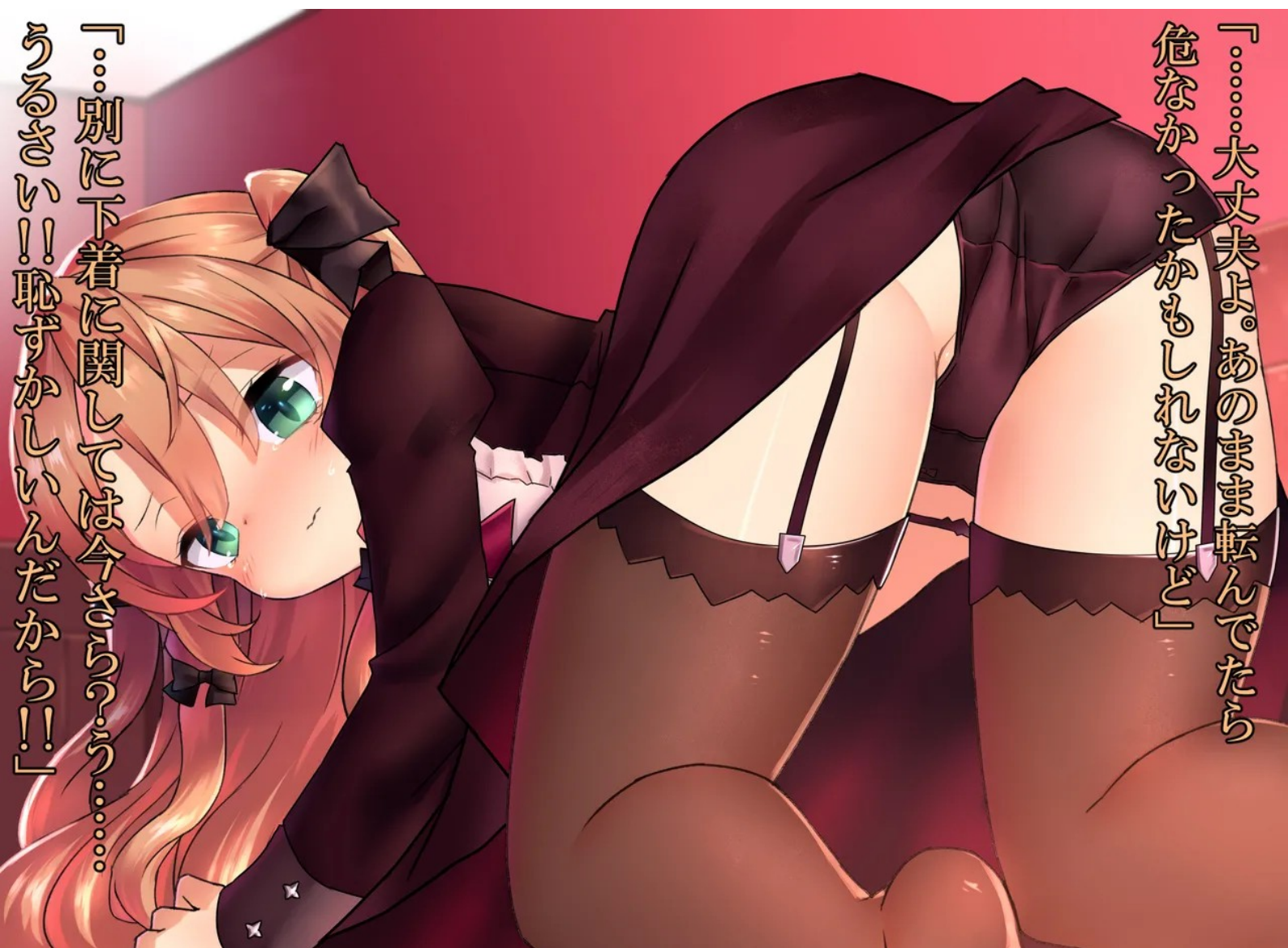
「……って、やだ、どこにいるのよ?!
早くどきなさいよ!」

退く前に、彼女に大丈夫かどうか聞いた。



「……大丈夫よ。あのまま転んでたら
危なかったかもしれないけど」

「…別に下着に関しては今さらっ？…う…
うるさい!! 恥ずかしいんだから!!」



その日はむっすりとしてすぐに自分の部屋へと戻っていったが、仕事が山場を越えたため翌日以降はまたマティと過ごせる時間が取れるようになった。

また、彼女の父、エドワード氏も着た時と比べ娘と接しているのをよく見るようになった。自分が来て以来楽しそうにしているマティを見て、彼もまた何か気付くものがあつたようだ。

マティもまた、以前より心を許して父親と会話できているようだ。

彼女の孤独の大元の原因が改善されつつあり、自分が居なくなっても大丈夫だと安心した。

この屋敷での生活もあとわずかだ。

ある夜、いつものようにマティと過ごしていたが、その日の彼女はどこか上の空だった。エドワード氏との仲を聞くと、

「うん……最近のお父様はどこか優しくなった気がする。前もそんな厳しかったわけじゃないけど……あなたのおかげね。」



その言葉に、これで自分も安心して屋敷を出ることができる。と返したが……明らかに彼女の表情が曇った。

「そんなの嫌」

普段の調子であまりに自然に出てきた言葉で、
危うく聞き流しかけた。



「…?!…あ、えつと、なんでもない！」

彼女自身にも思いがけず出た言葉のようだ。
その意味を聞こうとしたが、

「あの…エドワード様がお呼びです」

メイドに呼ばれ、彼の元に行くことになった。

「ほ、ほら、お父様も呼んでるし、今日はもう
いいわよ！おやすみなさい！」





「.....」

「…最初からこうなることが怖かった
はずなのに…この気持ちをどうしたら
いいの…」



「だってあの人にとって私は……」

「すべて確認したよ。今回は新しい事業の分もあるから凄い書類の山だ：君が来てくれて本当に助かったよ」

謙遜して答えたが、自分もかなりの労力をかけて取り組んだので内心嬉しかった。

「ここに居る間、娘の相手をしてくれた事にも礼を言おう。楽しそうに君と接するマティを見て、私も感化されたのかもしれない：最近娘の方もだいぶ素直になったよ。」

エドワード氏にも娘への愛情は元々充分にあったのだろう。ただ、一緒に過ごす時間の大切さを忘れていただけだ。

「予定通り、君は明後日には立つのだろうか？残り僅かな時間だが、よろしく頼む」

.....

「（そんなのイヤ）」

「……？ どうしたのかね？」

マティのあの言葉が残響し、一瞬上の空になってしまった。こちらこそ宜しくと返事し、エドワード氏の部屋を後にした。

：明後日には彼女の元から去ることになる。
だが、彼女はもしかしたら…

馬鹿な思い込みだと独り頭を横に振り、
自分の寝室へと戻った。



「――彼女は男への想いを秘めたまま別れることを良しとせず、最後の手段に訴えた。

男が行ってしまった前日の夜、彼女は男を自分の元へ誘った。何も知らず来た男へ、胸中の恋心を含め、全てを曝け出したのだ。男の存在を自らに刻み付けんがため――」

「この小説の女性…私と同じで…
男の人が行っちゃう前に…」



「!!」

「ま、まさか……そんなのいいわけないよね、
だってあの人はそんな気もなく優しくして
くれたんだから……」



「でも……明後日には彼は行っちゃう……
このままただの小娘で終わるなんて嫌……!」

「でもあの人に限って、いきなり手を出してくるなんてないよね…？ だったら、私の事が忘れられなくなるように…」



「中にオトナなのを着けて、何でもない思い出話をしてから、良い感じの空気になったら… 思い切って見せる感じで… いける… のかな？」

「……うん!!決めた……!!」

このままあの人がただの他人になって
二度と会えなくなるなんて絶対嫌よ!
きつと神様だって許してくれるよね……!!」



「だってこの想いに嘘偽りはないもの。」

「私は……彼のことが好きなんだから。」



翌日、朝にマティと廊下で会った。
昨日のことがあり、お互いにしどろもどろな
話し方になった。



だが、今朝の彼女は昨晚とは様子が違い、
どこか落ち着かない様子で、こちらにも
なかなか目を合わそうとしない。

「お、おはよう……え、えつと……今日、特に
夜に予定はないわよね……？」



今日の仕事は後処理や確認程度のもので
夜にはすっかり終わるだろう。

「え、えつとね…夜の11時に私の部屋に
来てくれる…？ その時になるまでは
いいから…いい？」



「明日発つんでしょ？ 私もずいぶんお世話に
なっただし…してあげたいことがあるの」

今日が最後の夜になる。
彼女なりに、数日間伴にいた付き人に
劳いの計画があるのだろう。
もちろん行くと快諾した。



「……!うん、楽しみにしてて……!」

予想通り、その日の仕事は早く終わった。

そういえば、昨晚の入浴時に女性用の
シャンプーが殆ど無くなっていたのを
思い出し、同じ物を商店まで買いに行った。

マティの髪はとても長い。

これが付き人として最後にできた仕事だと、
夕食前に満足して帰宅した。

さりげなく補充しようと浴室へ向かった――

—入った瞬間、ちやうど脱衣所に出てきた
マティと目が合ってしまった…

普段は絶対
夕食後に浴室に向かっていたのだが…

「このへんにシャンプーが…」



「きやつ!! ……つて、なんでこ…?」

今まで散々だったせいかな、もはやバスタオル

越しではあまり気にならないようだ。

「あ、それ! 気が利くわね、ありが…」



「……」

手を放していたせいで、
彼女のバスタオルが前にはだけ――



「ぎゃあっ!!!」

「……み、見えた?!」

見えなかったと嘘を付いた。

実のところ手ですら庇えていないが…



「……そう……ならいいけど……それに……」
彼女は何か考え込んでいる。



「……とにかく、11時に私の部屋に来ること、
いいわね?」

夕食後、エドワード氏に誘われて
酌み交わす事になった。

仕事の労いもあるが、

最後の夜、折角なので男として
一緒に飲みたくなったのだろう。

もちろん、前もって11時までと断りを入れた。

.....

「ど、どうしよう…
これじゃ引かれちゃうかな…？
もうすぐ彼が来るし、
これでいったほうが…」

「いや、まだ11時まで30分もあるし、
もつとよく考えなきゃ…！」

……ふう……

この後の事を考えてあまり
飲み過ぎないようにしたが、酒の力で
少し気分が浮ついたようだ。

マティは最後に何をしてくれるのだろうか？

時計が11時を回ったのを確認し、
わくわくしながら勢いよく
彼女の部屋の扉を開けた――

…そこには明らかに着替え途中のマティが
驚いた顔をして固まっていた。

「え…なんで… まさか…もう11時?!」
気付かずに約束の時間を迎えていたようだ。



「…待つて?! 忘れて!! いい? もういいから、早く出てって…!」
マティは着替えを見られた事よりも、他の何かを気にしたようで、何もない調子で出ていくよう促した。

彼女のほうを見ずに、この時間に何をしようとしていたのか聞こうとしたが…

「そ…それともういいから…忘れて! 気にしないで…! いいの…もう!」



今日の朝、自分の部屋へ来るよう言った時の
マティの様子はどこがおかしかった。
何か自分に言いたいことがあったのではと
聞いてみたが…

「じ、しつこいわね!! もういいの!!」

あんたの…いや…私が…

気付かなかったせいで…もう…
本





「出てっつて!!出てっつて!!」

「うああああああああ」

「あんたなんか街でも都でもさっさと
帰っちゃえばいいのよ!! ばか——!!」

：マテイに言われるがままに出ていった。
何か想いがあったに違いないが：これ以上
追求するのも野暮かと思い辞めた。

約束の時間だからと言って、ノックもせずに入ってしまったことを後悔した。

「い、行っちゃった……わたし……
考えてた通りにいかなかったからって……
なんてこと言っちゃったんだろ……」



「明日にあの人は行っちゃうのに…
私ったら怒ってばかりで…ぜんぜん
本当の気持ちを伝えられてない…」

「嫌われちゃった…よね…」





「.....ふふふ.....ふふふ.....」

「……ひっぐ……ぐすっ………」

心配になってこっそり扉の前に戻つてくると、
中から微かに彼女が泣いているのが聞こえた。
さっきの事を謝ろうと、優しくノックをした。

「!! あなたなの…?」

扉越しに先ほどの事を詫びて、入っていいか
どうか聞いてみた。

声色は不機嫌なままだったが、
「……ぐすっ……いいわよ……」

入ると、彼女はさつき見たままの姿で居た。
改めて彼女へ先程の事を謝った。

「……………」

彼女は長く黙ったまま、
こちらを睨んでいたが…



「……私こそ、さつきはごめんなさい、
考えてたことが崩れて、頭の中がまっしろに
なっちゃってた…」

「…ねえ…後でちゃんと話したいから…
12時にまた…来てくれる…??
次は…怒ったりしないから」



落ち着いたようだ。
拒絶されたままにならなかったことに
安堵し、必ず行くと約束し部屋を後にした。



…それにしても、隠していたものの
鏡越しに下着が露わになっていたが、

何故彼女はあのようなものを
身に着けていたのだろう…？



「よかった…また来てくれるんだ…
次は、余計なことをしようしないで
ちゃんと彼に本当の気持ち伝えなきゃ…！」

「隠すのが間に合ってよかった…
こんなの見られたら、いけないことを
考えてたのがばれ…」



「……って……あれ？」



「やあああああ!! もおおおお!!
(完全に見られてた!!)
!!!

その後、落ち着かない気持ちで
日付が変わるのを待った。

やはり…マティは自分と離れたくない…
いや…自分に好意を抱いたのだろうか？

明日に自分が出立してしまうと、
彼女は焦った行動に出たのだろうか？

…いや、もう追求するのはよそう。
真摯にマティの気持ちを聞くのだ。

12時、ノックをして約束通りに
彼女の部屋に入った。

マティはさつき身体の前に抱えていた
黒いワンピース姿で
こぢんまりと座っていた。



淋しそうな顔で涙ぐんでいる。

「…来てくれたんだ…えつと…さっつきは…」
ずつと言いたいことを考えていた
のだろうが、何から言えばいいか
迷っているような感じた。



何を考えていたのかは言わなくていい、
ただ、マティの率直な気持ちを教えてほしい。
そう言って、話し始めるのを待った。

「私…あなたと離れたくない…
このまま帰っちゃって…ただの他人に
戻るなんて絶対に嫌…！」



予想はしていたが、実際に彼女の口から
聞くと、胸が大きく脈打った。
二度と会えなくなることはない、と返した。

「それだけじゃないの!!私…こんなの…
初めてだから…わからなくなつて…」



「言わないほうがいいとも思ったけど、
やっぱり伝えたくて…私…」

「…あなたが好きなの。」



.....

「わかってるの!!私があんなこと言っても
困らせちゃうだけだって……!でも……
それが……わたしの……ほんとの気持ち……」



「ひつく…うつ…うつ…」

それ以上は感極まって言葉にすることができなくなり、目を伏せて泣いた。彼女は全て理解した上で、独り苦しんでいたのだ…



しかし自分は返した。そう想ってくれてとても嬉しい。こっちも離れたくはない。だが、今はその気持ちに応えることはできない、と。

「……!! ……………ははっ……」

「そうよね、やっぱり無理よね、
当然なのに、そう言われるのが怖かった…」



「もう…いいわ…いいって…
さんさん振り回してごめんね…」

「だって…私は…ただの小娘だからね…」

マティはそう言つて目を伏せ、
何も言わなくなってしまった。



…だから、マティが大人になったら

その想いに応えよう。その時になったら必ず
男としてマティを迎えに来る。

—そうぽつりと付け加えた。

「…………え…………？」

どことなく照れくさく、壮大というか、
気障というか、とにかく言い出すのに
随分勇気が要ることだった。



「……いいの…？ 私がオトナになるまで
何年も…それでも…待っててくれるの…？」



頷いた。今はまだ彼女を女として意識する
ことはできないが、実のところ、自分も
マティに強い愛着を持っていると自覚した。

自分も、またマティに会いたい。

—マティを好きになったのだ。

「…ありがと…大好き…」

やだ、胸がいつぱいで…なんもいえない…」



「オトナになる前でも、またいつでも
私に会いに来ていいんだからね…！」

「…ありがとう。おやすみなさい…」



「…ねえ、やっぱりもう一つだけ…いい？」

「一緒に寝たいの。」



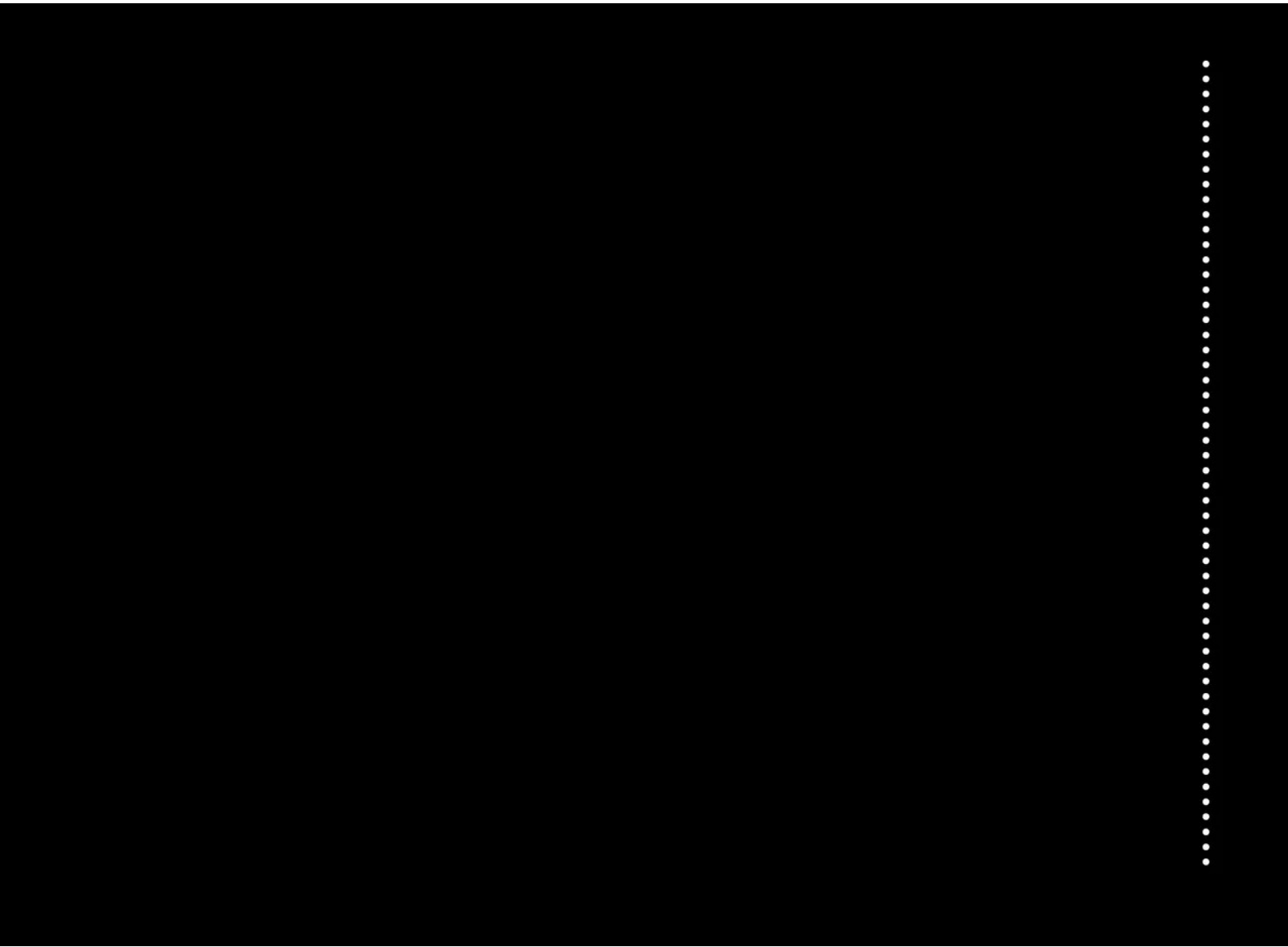


「…あつたかいな…誰かと一緒に寝たの
小さい頃にお母さんと寝たつきり…」

横に向かい合う姿勢になり、マティが
身体を寄せ、自分の胸に頭をうずめた。

しばらくは彼女の早い鼓動を感じていたが、
やがて寝息を立て始めた。

窓から差し込む月の薄明かりで、彼女の
うなじと寝顔が見えた。



……………何もやましい事ではないのだが、
流石にこの姿を屋敷の他の住民に
見られたら危険そうだ……

早朝にそろりと抜け出し、
自分の部屋のベッドへと戻った。

こうして、最終日を迎えた。

エドワード氏とは彼の部屋で短く挨拶を済ませた。あくまで自分は彼の雇われ人。自分が長々と別れを言おうと却って気を遣わせてしまう……という気配りを感じた。

廊下に出ると、年若いメイドが自分を待っていた。

「あの……お嬢様のお相手をしてくださり、
ありがとうございます……。」

一介の使用人として、それ以上は何も
言わなかったが、微笑みながら自分を
見つめる彼女の眼差しから
心遣いを感じた。

……心の中で礼を言い、
ゆつくりと会釈をした。

——マティは、既に玄関先で待っていた。

「……………」

お互い、黙って相手の顔を見つめている。

日が落ちた夕暮れに、家の前で二人だけ。
風の音と、微かな虫の声だけが聞こえている。



「……えつと、今までおつかれさま！
一緒にいられて楽しかったわ！じゃあ、
身体に気を付けてね！」

「またいつでも来ていいんだからね！」



湿っぽくならないように明るく、短い挨拶にしようというマティの気持ちを感じた。それに応え、にこやかに挨拶をして門の手前まで来たが…

…やはり名残惜しくて、つい彼女の方を振り返ってしまった。案の定、マティは不安そうな顔でこちらを見つめていた。



「…！ 待って…！」

彼女の近くへ戻った。

「…ほんとに来てくれるよね…？」

もちろん、約束をしたと頷いた。

「たとえそうでも…私、自信がないの。」

「こんな気持ちになったの、

あなたが初めてだから…この気持ちが
続かないんじゃないかって怖いの…」



昨晚も聞いた通り、初めてのことばかりで
彼女も自身の想いに自信がないのだ。

だから、こう返した。

これから機会があれば屋敷に来る。
その時に心が変わっていればそれでもいい。
だが、大人になるまで変わらなければ…
必ず約束通り、マティを迎えに行くと。



「……！　ありがとう……！
うん、胸が軽くなったわ……！」

「ぜったいにまた来るのよ？　約束だからね！」
その言葉に笑顔で応えた。



「.....えいとう...じゃあ...」

.....？



「……………はい。」



!!

「…なによ、そんなに
驚かなくてもいいでしょ？
見たことがあるんだから」

「…ふふ、やっとビックリさせた！
今まで見られてばかりだったんだもの、
最後くらいいいでしょ？」



「それじゃあね！
あなたと一緒にいられて、
ほんとに楽しかったわよ！」

「いっしょにしゃん…！」



「…だいすき。」





雨の中で出会った少女との数日間の話。

fin